

書評

火山噴火と災害

宇井忠英編, 東京大学出版会
A5判, 219ページ, 3,700円(税別)

本書の冒頭でいきなり刺激的な文に出会います。「火山国であるわりには、日本という国は、すなわちその国民は、火山をあまりよく知らないようである」。日本は生活のレベルや国民の教育レベルが高いにもかかわらず、噴火災害に対する対応はまづいではないか、という意見が述べられています。評者は火山の研究の一部に携わっていますが、そういう立場の者にとっては、この本を読むことはあまり楽しいものではありませんでした。つまり、あれもやらなければならない、これは実行していないではないか、というような指摘が列挙されているのですから、読んでいて腹が痛くなります。

本書は、序論以下火山現象の多様性、噴火と災害、噴火予知と防災・減災、火山災害予測図、火山情報の伝達と避難行動、火山の砂防、火山の制御の7章からなります。学際的な方向を目指していることが伺えます。隣の畑では何を育てているのでしょうか。

たとえば火山学と砂防学には、かつて接点がほとんどありませんでした。最近両者の所属する学会が共同で勉強会を開くようになりました。伊豆大島で開かれた会合では、地元の噴火経験者が、1950年噴火における溶岩流制御の話をしてくれました。従来から私達が知っていたのは、溶岩流を防ぐた

めの堤防を築く話でしたが、そこでは、ざんごうを掘って、被害が及ばないように溶岩を誘導する試みを実施した経験談が披露されたのです。参加者一同驚きました。こんな話ですら知らなかったのですから。

火山情報に関する章の中にはこんな記載があります。「知識としては認識していても、まさか自分が被害に合うはずがないと考え、その危険を無視してしまう心理を、社会心理学では『正常化の偏見』という」。これなどは、一般に広く国民にと言うよりは、むしろ火山研究者に真っ先に読んで欲しい文章です。

「日本最悪の直下型地震(濃尾地震1891年, 死者7,273人)は、翌年の震災予防調査会の設立を促した。震災予防調査会は、活火山の基礎調査や、火山観測と噴火予知の基礎を築く上で極めて重要な役割を果たした」(本書, p.80)。兵庫県南部地震(1995年, 死者6,400人以上)は、地震調査研究推進本部の設立を促しました。その後、活火山の基礎調査や、火山観測と噴火予知に関して、何かが飛躍的に推進されたという話は聞きません。火山噴火とその災害に関する研究分野の相対的な地位が落ちたのでしょうか、昔の人は偉かったですねえ、と澄ましていてよいのでしょうか。本書が少しでも世の中の役に立てば、と、「うっ、」また腹が痛くなってきました。ほかの読者の皆様はいかがでしょうか。
(環境地質部 須藤 茂)

